

人権なら

2018年5月1日

第89号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

今年度総会は5月18日に

田原本町企業内人権教育推進協が役員会

田原本町企業内人権教育推進協議会は3月22日、町庁舎で第3回役員会を開催。2018年度総会の開催について協議した。

中村聡・会長のあいさつ
のあと、各議案を審議。総会
は5月18日、青垣生涯学
習センターで開く。提案する議案や、来ひん、記念講演などについても協議。講演の講師には、藤田敬一
さん(写真。2015年度総会で)を招く、とした。



川西ふれあい祭りを開催

「共に生きる地域社会のふれあいをめざして」

第24回梅戸ふれあい祭りが4月1日、いぶき児童館と梅戸体育館であった。祭のテーマは「共に生きる地域社会のふれあいをめざして」。この日は満開のサクラが咲き誇る絶好の祭り日和となった。

ふれあい祭りは梅戸の古老への聞き取りがきっかけで始まった。梅戸の人々は古くから地元の糸井神社の祭りに参加していた。だが、いつからか祭りに参加しなくなって、祭りが無くなったようで、とても寂しいというつぶやきがあり、開催に向けて検討が始まった。

かつての解放同盟梅戸支部(現NPO法人なら人権情報センター川西支局)が梅戸自治会と梅戸隣保館に祭りの開催を呼びかけ、実現に漕ぎ着けた。

また、祭りの際、梅戸の子どもたちは他の自治会で行われていた子ども相撲を遠くから眺めているだけだった体験から、梅戸の住民でなくても一切排除せず、

祭りに集まってくる人たち全員を受け入れた。

この日、地域外で暮らす息子や娘、孫たちも親元に戻ってきて、参加。約200人が集まった。

太鼓・オカリナ演奏、模擬店などで賑わう

ふれあい祭りは、おなじみの川西和太鼓倶楽部「風姿花伝」の皆さんによる力強い「にぎわい太鼓」の演奏でオープニング。上原大洋(ひろし)・梅戸自治会長が祭りの成り立ちに触れ、「今後も大切にしていきたい」とあいさつした。



オカリナ演奏のポコア・ポコの上原さんと宮崎さんがオカリナの優しい音色で「となりのポポロ」「夕焼け小焼け」など8曲を奏でた。アンコールでは、「おぼろ月夜」を演奏。大きな拍手を浴びた。

祭りには、模擬店も出店。自治会と壮年会は花の苗を無料配布。婦人会はおでん、老人倶楽部は焼きそばと飲み物、保護者有志は輪投げ、コスモスの会は雑貨や手芸品などを、それぞれ販売した。

川西支局は毎回、実施しているビンゴゲームとくじ引きを行った。大人も子どもも出てくる玉の数字が伝えられると、配られた自分のカードを睨み、合った数字が見つかる大歓声を上げていた。

ビンゴゲームでの幸運の当選者には電子レンジやコーヒーメーカーなどが提供された。その他、お菓子や人形なども参加者に手渡された。

くじ引きでも、テレビなど様々な商品が当たり、大いに盛り上がった。子どもたちは、自治会からお菓子セットが提供されて大喜びだった。

「部落解放運動史」を編纂へ

3年後の刊行をめざし作業を進行中

「奈良の部落解放運動史」の編纂作業が始まった。

昨秋以降、山下力さんと議論し、吉田栄治郎さんに相談しながら段取りしてきた。



編纂はNPOなら人権情報センターと、反差別・人権交流センター(絆)の共同事業として実施する。

昨年11月から、書庫に保管していた会議録、議案書、研究集会冊子、解放新聞、闘争ニュースなど、運動・組織関係の書類を持ち出し、10年ごとに区分けする作業に取り掛かり、2月までに終えた。4月からは、さらに1年ごとの区分けに入っている。これらの作業を仕事・活動の合間を縫って4人ほどが進めている。

今後の作業工程は①目録の作成②編纂方向の議論と読み込み・検討③前史・分裂まで・その後に分けた執筆④編集・印刷となる。



こうした作業を3年をめどに仕上げたいと考えている。

編纂作業と並行して勉強会の開催も企画

また、編纂作業とともに、「部落史や運動史、差別をどう考えるのか」などについての勉強会を2、3ヶ月に一度のペースで開くことにしている。「改めて勉強したい」「議論する場が欲しい」という人たちが周りに多くいる。この編纂事業が多くの人たちとの新たな出会いと交流の場になることを願っている。

初回の勉強会は6月30日(土)午後2時から4時半まで、三宅町「あざさ苑」1階会議室で開く。話題提供者は石元清英・関西大学教授。問い合わせはNPOなら人権情報センター(担当・にしはら)まで。

カンボジア在住の古川沙樹さん

TV番組「こんなところに日本人」に出演

朝日放送テレビが4月10日に放映した3時間スペシャル「世界の村で発見・

こんなところに日本人」にカンボジアで活動している



三宅町出身の古川沙樹さんが出演した。

この番組は、「世界の極地・未開の地、そこにたった一人の日本人が住んでいる」。そこへ芸能人が苦労を重ね、自力で訪ねる、という人気番組である。

タイとの国境の町で日本食堂を経営

この日の番組は「東南アジア/カンボジア/タイとの国境近くの村に

いたった一人の日本人女性」を探すという内容。訪れたのは女優の北乃きいさん(写



真。右から3人目が北乃さん。4人目が沙樹さん)。

沙樹さんはカンボジアの子どもたちや学校への支援などの活動を始めて13年になる。昨年6月からは、国境の町「ポイペト」で日本食堂「HARU」(写真上)を営む。ここ数年、ポイペトは目まぐるしく変化し、工場団地が稼働し始め、日系の会社も数社参入している。

工場が出来て、雇用が生まれれば、タイ側への出稼ぎ(密入国)という大きな危険が少しでも減る。

日本での「NPOサンタピアップ」(カンボジア語で平和)の活動も広がりを見せている。この春から連合の助成を受け、学校への飲料水支援も始まった。

番組放送後、笑顔いっぱいに逞しく活動する沙樹さんを知った人たちから、「TVを観た! 感動した! 応援したい」との連絡が沙樹さんの所に届いたという。

基地建設に抗議の声上げる

奥間政則さんが辺野古・高江への関わり語る

関西・沖縄戦を考える会が3月16日、大阪市内で第18回講演会を開いた。

奥間政則さんが「沖縄戦とハンセン病ーわたしが辺野古・高江にかかわった経緯」と題して話をした。



奥間さんは辺野古や高江の米軍基地建設現場に毎日通い、監視と調査を続ける。

土木技術者の専門的見地から、工事の内容や計画のずさんさを指摘し、抗議の声を上げ続けている。

最初は高江の座り込みに2015年から参加。技術的な視点から防衛局のずさんなヘリパッド建設工事を指摘してきた。2016年からは、辺野古に関わり、海洋土木工事の経験を生かして建設予定地の地質を検証。護岸構造が活断層につながるとして、辺野古新基地の滑走路先端部の地盤を問題視する。

土木技術の専門知識を基に基地建設に反対

奥間さんは30年近く、沖縄県や国道・防衛局などの公共工事の現場管理責任者を務めてきた一級土木施工管理技士だ。その専門知識を基にした説明は説得力がある。辺野古の海底は琉球石灰岩という軟弱な地盤に覆われ、大型建造物の建設にまったく適していない。琉球石灰岩は空洞が多く、「骨粗しょう症のような状態」だという。さらに、直下を走る断層が活断層の可能性が高く、工事の危険性を告発する。

奥間さんが、基地反対の立場で運動に関わるようになったきっかけの一つとして、ハンセン病患者だった両親の存在がある。

だが、両親は生前、そのことを話すことは一切なかった。奥間さんが大人になって、両親の病気のこと、ハンセン病に対する差別の事実を知ったときの衝撃はあまりにも大きかったという。

奥間さんは国策として長年、隔離政策を採り、ハンセン病患者への差別を助長させた政府と、軍事基地を沖縄に押しつける国の構図は同じだと考える。そして、基地建設反対運動に参加するようになった。

ハンセン病患者だった両親への想いを込め

あるとき、父親が書いた手記をパソコンで清書してほしいと頼まれた。

手記には、沖縄戦で空襲やマラリアに苦しめられた壮絶な体験や、戦後の米軍による圧制、本土復帰した後も平和が訪れないことへの怒りも綴られていた。

発症したハンセン病のことも書かれて

いた。父親は発症後、奄美大島の和光園という日本で唯一、断種・堕胎を行っていなかった園長がクリスチャンの療養所に入った。そこで母親と知り合い、結婚。出産も認められていて、奥間さんが生まれた。



ハンセン病・沖縄差別に向き合いながら

奥間さんは父親が入所していたハンセン病療養施設「愛楽園」を訪ね、父親に聞き取りしていた学芸員に出会う。その証言集には、父親が差別や嫌がらせを受け、職を転々とせざるを得なかった辛い日々のことが書かれていた。奥間さんは父親が受けてきた差別を知り、国が行ってきたハンセン病差別や、沖縄に対する差別に向き合うことができたという。

父親は社会でひどい差別を受けていたが、家庭ではさらに弱い私や母に暴力を振るっていた。差別には「弱者にしわ寄せがいく」構造がある。差別は連鎖していく。その差別の大元が「国策としての差別」。弱者の声を聴いてもらい、一緒に差別のない社会を築いていきたい、と話を結んだ。

子どもの居場所活動

ひまわりの家が春休みの「お楽しみ会」

ひまわりの家が3月29日、「子どもの居場所」活動に取り組んだ。この日は毎年恒例の春休みの「お楽しみ会」だ。保育園児・小学生・中学生・高校生が多数参加した。



子どもたちは買い物班と準備班に分かれて活動。焼きそばと、たこ焼き(ロシアンルーレット風)

の、なんだか怪しい企画に子どもたちは大はしゃぎ。たこ焼きの中にはチョコや、からしも入れる。焼きそばの材料や、デザートジュースなども買い込み、準備が始まった。



出来上がりを美味しく、ワイワイと大騒ぎしながら食べ合った。午後は恒例のドッチボールに興じた。子どもたちは楽しい一日を過ごした。

編集後記 ★★★★★★★★★★

セクハラやパワハラが政界、官界、スポーツ界などで横行している。加害者は自身の行為をなかなか認めない。逆に開き直るケースも。それによって、二次加害を起こしている。ともすれば、被害者は声を上げにくい。告発すると、逆にバッシングに遭う。そのため、多くの人が泣き寝入りしている。女性が自身の性的被害を「MeToo=私も」と抗議する運動が世界中で広がる。性暴力は許されないのだ。だが、日本では慰安婦問題でも多くの政治家が性暴力に無頓着。人権意識に欠ける。人間の尊厳を蔑ろにしても平気だ。男尊女卑の思想を克服し、男女平等社会の実現をめざしたい。

事務所横に公園、道の駅

「唐古・鍵遺跡史跡公園」と「レスティ唐古・鍵」

NPOなら人権情報センターの事務所北側に「唐古・鍵遺跡史跡公園」(写真)が設置され、4月17日にオープン。



3日後の20日には事務所前を通る国道24号線沿いに道の駅「レスティ唐古・鍵」もオープンした。

唐古・鍵遺跡(国史跡)は弥生時代の大規模環濠集落遺跡。全体の面積は約42万平方メートルもある。史跡公園では、大型建物跡の柱を表現したり、環濠の一部を復元する。シンボルは楼閣で、発掘された土器に描かれていた絵画を元に復元した。北西側には遺構展示情報館も造った。当時のムラの様子を表したジオラマ展示を行っている。

また、道の駅(写真)は、1階に地元の野菜や県内の加工品の販売スペース、2階にカフェや多目的室がある。3階は史跡公園を一望できる展望室がある。



販売スペースでは、地元の社会福祉法人「なら桜桃会」が手作りこんにやく「唐古美人」や、「大和茶」「楼閣せんべい」などを販売している。

この史跡公園や道の駅に来られた際は、当事務所に立ち寄ってください。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/